

## 日本海におけるアカガレイの食性

### —新潟沖を中心に—

廣瀬太郎・木暮陽一・森本晴之（日本海区水産研究所）

大西健美（新潟県水産海洋研究所）

【目的】水産庁委託事業「漁場生産力変動評価予測調査」の一環として、新潟県沖日本海におけるアカガレイの主要餌生物を特定し、それら餌生物の分布特性とアカガレイの摂餌生態との関係を明らかにすることを目的とした。また、他の海域における食性と比較することで、新潟沖における食性の特徴について検討した。

【方法】2001年6月～2003年8月にかけて、各季節に新潟県沖で採集したアカガレイを試料とした。各試料について体長、体重を測定し、胃内容物を摘出した。胃内容物は分類、同定後、各餌項目の個体数と重量を計測した。アカガレイについては性別、体長別に、若魚、雄成魚、雌未成魚、雌成魚と区分し、区分ごとに空胃率、充満度、餌項目別出現頻度、重量百分率、個体数百分率、重要度指数(IRI)およびその百分率を採集月毎に計算した。

【結果】新潟県沖のアカガレイは、春季にはツノナシオキアミ（以下オキアミ）を捕食し、それ以外の季節ではキタクシノハクモヒトデ（以下クモヒトデ）を捕食していた。この傾向は大型の雌成魚にとくに顕著であった。日本海西部海域で重要な餌となっているイカ類は、ほとんど捕食されていなかった。オキアミを捕食する場合、空胃率が低下し、充満度が高くなる傾向が認められ、アカガレイの摂餌活性が高まることが考えられた。一方、クモヒトデを主に摂餌する場合は、空胃率が高く、充満度が低くなった。新潟県沖では、春季にオキアミの分布量が多く、より浅所まで出現するため、深場への移動前のアカガレイと分布が重なり、多く捕食されるものと考えた。それ以外の季節では、オキアミの鉛直移動による降下水深よりアカガレイの分布水深が深いため、オキアミを利用できないと考えた。一方、日本海において、クモヒトデは年間を通して分布様式が変化しないため、オキアミが利用できない場合はクモヒトデを摂餌すると考えた。

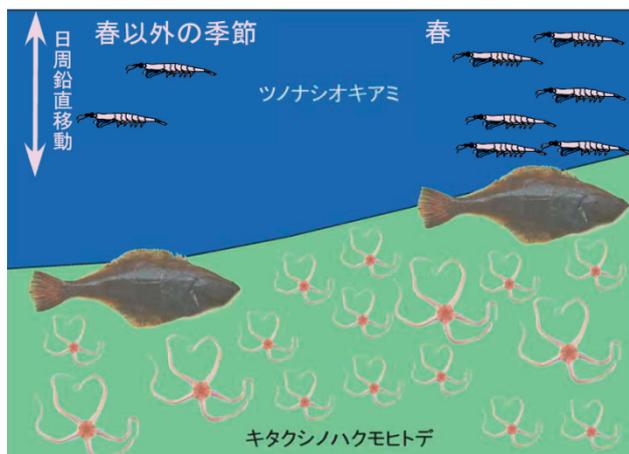


図 新潟沖における餌生物とアカガレイの関係

クモヒトデは1年中多く存在するものの、春はオキアミが利用できるため、オキアミを捕食する。それ以外の季節ではオキアミを利用できないためクモヒトデを捕食する。